

東アジアにおける経典見返し絵の研究

—栗棘庵宋版法華経を中心に—

荒巻 史枝（京都大学大学院）

栗棘庵所蔵「宋版法華経七卷」（京都国立博物館寄託品）の見返し絵は、横長の画面で、右半分に精緻な釈迦説法図が描かれ、左半分には経巻の内容に対応する説相図が描かれている。宮次男氏はじめ先行研究では、多少の変化はあるものの後に中国・朝鮮・日本で制作された法華経見返し絵の中にも見られ、広く流布した図様の一つであるとされている。

遺品の少ない大陸作の法華経見返し絵の一つであり、栗棘庵本以降の法華経見返し絵の展開と色濃い影響関係にあり（中国作では徳川黎明会蔵紺紙金字法華経、故宫博物院蔵元刊法華経、高麗作では大乘寺・天倫寺蔵紺紙金字法華経、鍋島報效会蔵紺紙金字法華経、根津美術館蔵紺紙金字法華経、日本作では、奈良国立博物館蔵・安田文庫蔵紺紙金字一字宝塔法華経（以下「心西願経」）、唐招提寺蔵賢学版、臨川寺版など）、これまでその規範性は指摘されつつも、制作背景や個々のモチーフ、また経文との関係について詳細に論じられてこなかった。本発表では、栗棘庵本に新たな検討を加えることで、その美術史上の位置付けを行う。

本作には各相の画面上に「陳忠」、「陳高」、「李栄」三名の刻工銘があり、他の制作年の判明する版本や経絵にもその名が求められ、彼らの活躍した年代がおおよそ紹興年間と推測されている。今回新たに他の版本中に彼らの名を見出すことができた。また、本経の刊記に見える開版者の名「施宏」が紹興年間の他の版本の刻工銘にあることから、見返し絵と経文が紹興年間に、ほぼ同時に制作されたことを主張したい。

本作品は、『東福寺誌』によると、天明五年の宝物目録に仏照禅師が将来したと記され、弘安二年頃にわが国にもたらされたことがわかる。転写関係にあるとされる心西願経は、長寛元年の成立であるから、栗棘庵本系の経絵は紹興年間の成立から時を隔てずに日本にもたらされていたと推察される。

制作場所については刊記に「定海縣観音院版」とあることから、観音院の推定を試み、南宋における当時の版経制作の意義について考察する。

また、説相図については、蘇州瑞光寺塔紺紙金字法華経や仏宮寺釈迦塔契丹大蔵経版法華経等の先行する大陸作の法華経絵とは構図やモチーフに共通点が少ないが、金剛峯寺蔵紺紙金字法華経八巻の巻第四と構図がほぼ同じであることから、金剛峯寺本が制作された太康七年（1081）頃には栗棘庵本の祖となる図様が成立しており、それが広い範囲で交流していたことを指摘する。しかしながら栗棘庵本には、他の法華経絵には見られないモチーフも見られることから、その特殊性もあわせて指摘する。

栗棘庵本を軸にして、東アジアにおいて経絵の図様がそれぞれの国で異なる展開を遂げたことを理解する一助としたい。